

東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展

# 「マルセル・デュシャンと日本美術」

2018年10月2日(火)~12月9日(日)

東京国立博物館平成館

## プレスリリース

\* 本資料からの画像転載はできません。

Q. 花入と便器の  
共通点は？

DUCHAMP      JAPAN



マルセル・デュシャン  
泉  
1917年、ニューヨークの芸術家  
マルセル・デュシャンは、この作品を制作し、  
「Fountain」として発表された。これは、  
「Readymade」として知られる。これは、  
「Fountain」として発表された。これは、  
「Readymade」として知られる。

竹一風阿弥 徳 阿弥寺  
伝子明休作  
文政10年(1828) 木、高約15cm

東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展  
マルセル・デュシャンと  
日本美術 2018 10.2(火)→12.9(日)  
休館日：月曜日 前々どし10月8日(月・祝)は閉館、翌9日(火)は休館

MARCEL DUCHAMP and JAPANESE ART

 東京国立博物館 平成館 (上野公園) TOKYO NATIONAL MUSEUM (UENO PARK) [www.tnm.jp](http://www.tnm.jp)  

## 東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展 「マルセル・デュシャンと日本美術」

フィラデルフィア

### 聖地からデュシャンがやってくる！

マルセル・デュシャン(1887 - 1968)は、伝統的な西洋芸術の価値観を大きく揺るがし、20世紀の美術に衝撃的な影響を与えた作家です。

この展覧会は2部構成となります。第1部「デュシャン 人と作品」(原題 *The Essential Duchamp*)展は、フィラデルフィア美術館が企画・監修する国際巡回展で、同館所蔵の世界に冠たるデュシャン・コレクションにより、油彩画、レディメイド、関連資料・写真など計150余点によって、彼の創作活動の足跡をご覧ください。デュシャンの革新的な思想に触れることで、知的刺激に満ちることでしょう。

第2部「デュシャンの向こうに日本がみえる。」展は、東京国立博物館館の日本美術コレクションで構成、もともと西洋とは異なった社会環境のなかで作られた日本の美術の意味や、価値観を浮かび上がらせ、日本の美の楽しみ方を新たに提案しようとするものです。デュシャンの作品を日本美術と比べて見ていただく世界ではじめての試みです。

この展覧会では「芸術」をみるのではなく「考える」ことで、さまざまな知的興奮を呼び起こしてください。



ポートレート No. 29  
ヴィクター・オブサツ  
1953年 フィラデルフィア美術館蔵  
Philadelphia Museum of Art, Library  
and Archives: Gift of Jacqueline, Paul  
and Peter Matisse in memory of  
their mother Alexina Duchamp  
Victor Opatowitz/Moeller Fine Art,  
New York 2018.

### 開催概要

- 会 期 : 2018年10月2日(火)～12月9日(日)
- 会 場 : 東京国立博物館 平成館特別展示室第1室・第2室
- 開館時間 : 9:30～17:00  
ただし、金・土曜日、10月31日(水)、11月1日(木)は21:00まで(入館は閉館の30分前まで)
- 休 館 日 : 月曜日(10月8日[月・祝]は開館)、10月9日(火)
- 観覧料金 : 一般1,200(1,000/900)円、大学生900(700/600)円、高校生700(500/400)円  
中学生以下無料 \* ( )内は前売り/20名以上の団体料金  
\* 障がい者とその介護者一名は無料です。入館の際に障がい者手帳などをご提示ください。  
\* 前売券は、東京国立博物館正門チケット売場、展覧会公式サイト、各種プレイガイド等で、2018年8月24日(金)～10月1日(月)まで販売。
- 交 通 : JR上野駅公園口・鶯谷駅南口より徒歩10分  
東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅、千代田線根津駅、京成電鉄京成上野駅より徒歩15分
- 主 催 : 東京国立博物館、フィラデルフィア美術館
- 展覧会公式サイト : <http://www.duchamp2018.jp/>

*The Essential Duchamp* is organized by the Philadelphia Museum of Art.

※*The Essential Duchamp* 展巡回予定(第2部「デュシャンの向こうに日本がみえる。」展は巡回しません。)

【韓国・ソウル】 国立現代美術館 2018年12月22日～2019年4月7日

【オーストラリア・シドニー】 ニューサウスウェールズ州立美術館 2019年4月～8月

The international tour has been made possible by the Terra Foundation for American Art.

## 構成と主な作品

### 第1部 マルセル・デュシャン没後50年記念「デュシャン 人と作品」 *The Essential Duchamp*

第1部は、フィラデルフィア美術館が企画・監修、アジアの3会場で巡回開催する「デュシャン 人と作品」(*The Essential Duchamp*)展です。「現代美術の父」と称されるマルセル・デュシャン(1887-1968)の作品および関連文献資料、写真などにより、デュシャンの人生と60年以上にわたる芸術活動を時系列でたどります。

展覧会を通して語られるのは、彼の人生そのものです。フランスおよび米国での彼の生涯においてカギとなる場面や重要な活動、また人間関係を概観、彼の作品や現代美術における重要性を紹介するとともに、彼の多様な人となり、さらに、芸術と生活の垣根をなくそうとするさまざまな試みを紹介します。展示作品は、1912年ニューヨークで発表、デュシャンを一躍有名にした《階段を降りる裸体 No. 2》をはじめとする絵画、便器を「アート」にした《泉》を含むレディメイド、映像、写真や、豊富な関連の文献・写真資料など、フィラデルフィア美術館が誇る世界有数のデュシャン・コレクションが一堂に会します。

生涯を通じてデュシャンは「決して繰り返さない」「同じことをしない」よう、常に新しい表現方法を模索し続けました。一方、その根底に流れるコンセプトや表現モチーフは一貫しています。このある種の矛盾と、それぞれの時期の彼の制作物・行為が繋がっていることを、作品と資料で明らかにしてゆきます。

### 第1章 画家としてのデュシャン A Painter's life

はじめに、1902年から1912年までの間の「画家」としてのデュシャンの事績を追います。1902年に絵画制作を始めた後、デュシャンは印象主義から象徴主義、そしてフォーヴィスムにいたるまで、さまざまな前衛的な様式に実験的に取り組みました。彼が15歳のときに描いた《ブランヴィルの教会》(1902)から、キュビズムに対する独特な取り組みによりデュシャンの名を広く知らしめることになった《階段を降りる裸体 No. 2》(1912)、その後いわゆる「画家」としての最後の作品《花嫁》(1912)まで、油彩画を中心に彼の幼少期の写真、生家や故郷の風景、家族の肖像写真をともに展示、「画家」デュシャンを紹介します。



**ブランヴィルの教会**  
マルセル・デュシャン  
1902  
カンヴァス、油彩  
61.3 x 42.9 cm  
Philadelphia Museum of Art. The Louise and Walter Arensberg Collection, 1950  
© Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1397  
デュシャンが初めて制作した油彩画。



**階段を降りる裸体 No. 2**  
マルセル・デュシャン  
1912  
カンヴァス、油彩  
147 x 89.2 cm  
Philadelphia Museum of Art. The Louise and Walter Arensberg Collection, 1950  
© Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1397  
裸体が階段を降りる動きを表した作品で、1913年発表され大スキャンダルとなった。

## 第2章 「芸術」でないような作品をつくることができようか Can works be made which are not 'of art'?

この章では、通常の「絵画」制作を止めたデュシャンがその後どのように進んだか、1912年から1917年までの活動をたどります。この時期デュシャンは、伝統的に理解されていた絵画の枠を押し広げ、そこから飛び出しました。彼の最も重要な傑作の一つ、《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも》(通称『大ガラス』)(1915-23)を構想したのはこの時期で、その制作に取り掛かったのは、彼がニューヨークへ移住した後です。

また、いわゆる「レディメイド」\*と呼ばれる一連の作品の制作をはじめたのもこの時期でした。「レディメイド」は、ある機能をもった物品を本来の日常的な用途から切り離し、「作る」という概念に相対するものとして、「芸術作品」として「意味づける」ことでした。このセクションでは、フィラデルフィアにある『大ガラス』\*の原品を写真パネルで紹介するとともに、東京大学駒場博物館所蔵の『大ガラス』複製(東京版)を展示、デュシャンの制作意図と作品の意味を考えます。

### \*「レディメイド」

デュシャンは1913年以来12のレディメイド作品を制作していますが、フィラデルフィア美術館はそのうち6点を所有しています。今回は、その中から《車輪》、《瓶乾燥器》、《泉》の3点が出品されます。

### \*「大ガラス」(展示は複製東京版、1980 [原品マルセル・デュシャン作1915-1923] 監修：瀧口修造、東野芳明 東京大学駒場博物館蔵)

この作品は、デュシャンが1915年から23年の間取り組み、未完のまま放置されていました。1926年ブルックリン美術館で初めて展示された後、ガラス部分にひび割れが入ってしまいました。デュシャンはこれを修理し、ひび割れを作品の一部として受け入れました。



#### 自転車の車輪

マルセル・デュシャン

1913/1964

直径 64.8、台高 59.7 車輪、木、ペイント

Philadelphia Museum of Art.

Gift of the Galleria Schwarz d'Arte, Milan, 1964

© Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1397

1913年最初の「レディメイド」の構築物として自転車の車輪が選ばれた。デュシャンは、「車輪を回すのは落ち着くし、いい気晴らしになる。」と語っている。



#### 泉

マルセル・デュシャン

1917/1950

30.5 x 38.1 x 45.7 磁器製男性用小便器

Philadelphia Museum of Art. 125th Anniversary Acquisition.

Gift (by exchange) of Mrs. Herbert Cameron Morris, 1998

© Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1397

デュシャンが R.Mutt (リチャード・マット)という偽名を使って男性用小便器にサインをし、芸術作品として展覧会に出品したが、展示を拒否され一般に公開されることはなかった。

### 第3章 ローズ・セラヴィ Rose Sélavy

このセクションでは、1920年代および1930年代のパリ滞在、そして第二次世界大戦中に亡命者として過ごしたニューヨークでのデュシャンを取り上げます。

1921年、彼は職業を芸術からチェスへ転換しようといひ始め、プロのチェス・プレイヤーであるかのようにチェスへと没頭しました。また、1920年代には自らの分身として「ローズ・セラヴィ」と名付けた女性に扮し、この人格のもと、ダジャレや語呂遊びなどの言葉の実験を試み、新たな制作に取り組みました。また、遠近法や視覚に関する長期間の研究の蓄積に基づいた、機械的な仕掛けに取り組みだのもこの時期です。一方、デュシャンは、ニューヨークでの反芸術活動「ダダ」と活発に交流していました。こうした活動・交流は、フィラデルフィア生まれの写真家で、デュシャンがたびたび共作した、「ダダ」の中心人物の一人であるマン・レイ(1890 -1976)の協力を得て1926年に制作した前衛的な短編映画『アネミック・シネマ』に結実します。

1930年代半ば、デュシャンは自分自身の作品を複製というかたちで再考することに興味をもち、『トランクの中の箱』(1935-41)としても知られる作品のミニチュアからなる携帯用の美術館が生み出されました。

1940年代には、デュシャンの存在が再び美術界に戻ってきます。彼は、若い芸術家を紹介する展覧会の企画者となり、芸術家としてではなく、企画者あるいはキュレーターという裏方として活躍、有名になっていきます。いわゆる芸術家としてではなく芸術活動に携わること自体により、芸術あるいは芸術家とは何か、という垣根を打ち破っていくのです。



マルセル・デュシャンあるいはローズ・セラヴィのノによる  
(トランクの中の箱)

1935-1941, 1963-1965 (中身);

Series F, 1966 edition 41.3 x 38.4 x 95cm

Philadelphia Museum of Art: Gift of Anne d'Harmoncourt, 1994

© Association Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 G1397

過去の自身の作品をミニチュアにして革製トランクに入れたもの。

### 第4章 遺作 Our Lady of Desire 1950s-60s

最後のセクションでは、デュシャンが芸術の世界そして広く文化人として伝説的な地位を獲得した最後の20年についてひも解きます。《1. 落ちる水 2. 照明用ガス、が与えられたとせよ》(通称『遺作』)は、デュシャンとフィラデルフィア美術館との関係を大変よく示す作品です。この作品は、デュシャンがフィラデルフィア美術館内の、自身による『大ガラス』が設置してあるすぐ近くの空間に設置することを想定して制作していたもので、彼の最後の作品となりました。彼は20年以上誰にも言わず、秘密でこの作品を部分ごとに制作していました。死後、この作品の制作

について記した彼のメモが見つかり、その制作していたすべてのパーツをフィラデルフィアに移送、組み立てたのが、現在同館に常設されている『遺作』です。この作品のいくつかのモチーフは『大ガラス』と共通するものであり、彼は『遺作』が常に大ガラスと近くにあることを強く望んでいました。

このセクションでは、『遺作』を映像で紹介するとともに、制作に至るまでの彼のアイデアノートやメモ類、さらに『遺作』の一部となったオブジェや展覧会の写真など、彼の最後の作品の制作状況を生々しく伝える資料を展示します。



『遺作』のモデルとなったドアの横に立つティニー・デュシャン  
(キャダック近くの小さな町の通りにて)

Philadelphia Museum of Art. Gift of Jacqueline, Paul and Peter Matisse in memory of their mother Alexina Duchamp

## 【フィラデルフィア美術館のデュシャン・コレクションについて】

フィラデルフィア美術館は、デュシャンの絵画、彫刻、版画など 200 件以上の作品を所蔵しています。このコレクションの核となっているのはルイズ&ウォルター・アレンズバーグ夫妻からの寄贈品です。デュシャンはアレンズバーグ夫妻の美術品アドバイザーを務め、夫妻が 1950 年にそのコレクションを美術館に信託したのは彼の導きによります。その後まもなく、フィラデルフィア美術館は別の重要な収集家、キャサリン・S. ドライアー氏から『大ガラス』の寄贈を受けました。一方、『遺作』は 1968 年のデュシャンの死後コレクションに加わり、1969 年以來、デュシャンの遺志に基づき、専用の場所に設置されています。

作品だけでなく、フィラデルフィア美術館が所蔵するデュシャン関連のアーカイブおよび参考資料は、他のどのコレクションよりも広範囲にわたるものです。個人的な書類や写真のほか、デュシャンの末亡人アレクシーナ（ティニー）・デュシャンがまとめた制作準備資料、また、フィラデルフィア美術館の職員が収集した大変貴重かつ特色ある研究資料が多くあります。

さらに、アレンズバーグ・アーカイブと呼ばれる同夫妻のコレクションに関連する記録や、書簡、さらにデュシャンの仲間の芸術家や知識人と夫妻との交流を記録した、夫妻の蔵書すべての寄贈を受けています。これら全体として、美術館の図書館・アーカイブでは 42,500 件以上のデュシャン関連資料を所蔵、作品とあわせて世界有数のデュシャン・コレクションです。

## フィラデルフィアからのメッセージ

### フィラデルフィア美術館館長 ティモシー・ラブ

Mr. Timothy Rub, George D. Widener Director and CEO, Philadelphia Museum of Art

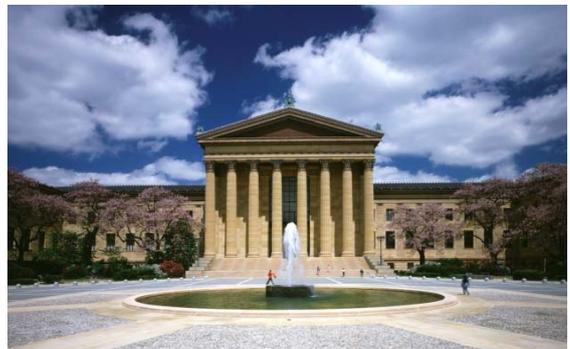
フィラデルフィア美術館は、この画期的な展覧会を主催するにふさわしい美術館で、東アジア・太平洋地域の新しい観客とともにこの展覧会を共有することを大変喜ばしく思います。

1950年にルイズ&ウォルター・アレンズバーグ夫妻がその特別なコレクションを当館に寄贈されて以来、当館のデュシャン・コレクションはデュシャンの仕事に関心を抱く人たちが必ず取り上げるものであり、彼の創造的軌跡を研究するための重要な核となってきました。私たちが受け継いでいるのは、今ではわれわれの近現代美術の理解の中心となっている遺産なのです。この展覧会で、デュシャンにあまりなじみのない皆さまに彼の仕事を紹介し、彼の思考の複雑な展開、人格の様々な側面、そして、芸術と生活の間の境界を取り払うために彼が絶え間なく続けた活動を知っていただきたいと思います。

### フィラデルフィア美術館近代美術担当学芸員・本展キュレーター マシュー・アフロン

Dr. Matthew Affron, the Muriel and Philip Berman Curator of Modern Art, Philadelphia Museum of Art

デュシャンがあるときいたずらっぽく言及したのは、『階段を降りる裸体 No. 2』が、ある意味では自分の物語にとって代わるものであり、彼自身は「その絵画が表す現実の背後にいる影のようにぼやけた存在にすぎない」ということです。事実、デュシャンは、われわれの芸術の創造と理解に対する考え方を根本的に変えた存在でありながら、芸術界のアヴァンギャルド現象においては表に出るよりは比較的沈黙を保とうとしました。彼はあえて、その人格に謎というオーラをまとったのです。



フィラデルフィア美術館外観

Philadelphia Museum of Art, East Entrance.

Photo: Philadelphia Museum of Art.

※以上、フィラデルフィア美術館2018.2.22発表プレスリリースを翻訳転載

## 第2部 「デュシャンの向こうに日本がみえる。」

※会期中に展示替えがあります。

### 第1章 400年前のレディメイド

「竹一重切花入」は、千利休(せんのりきゅう)が天正18年の小田原攻めに同道し、伊豆韮山(にらやま)の竹をもって作ったといわれた作品をもとに作られたものです。真竹の二節を残し、一重の切れ込みを入れた簡潔な作です。利休は陶工など職人が精巧に作った器や花器ではなく、傍らにあった竹を花入に用いて絶大な価値を持たせました。これは、究極の日常品(レディメイド)です。



竹一重切花入 銘 園城寺 おんじょうじ  
伝千利休作  
安土桃山時代・天正 18 年  
(1590)  
東京国立博物館蔵  
松平直亮氏寄贈



黒楽茶碗 銘 むかし咄 ぼなし  
長次郎作 安土桃山時代・  
16 世紀  
東京国立博物館蔵

### 第2章 日本のリアリズム

古来、日本の絵画は、記号化された形象によって事物を表現していました。つまり視覚的なリアリズムが、ほとんど求められていませんでしたが、江戸時代の浮世絵師・写楽は伝統的な絵の描き方を学ばなかったため、女形を演じる役者を男として描くなど、歌舞伎役者を見たままに描こう(リアリズム)として非難されたのでした。



重要文化財  
三代目大谷鬼次の江戸兵衛  
東洲斎写楽筆  
江戸時代・寛政 6 年(1794)  
東京国立博物館蔵  
【展示期間】10月 2 日～28 日



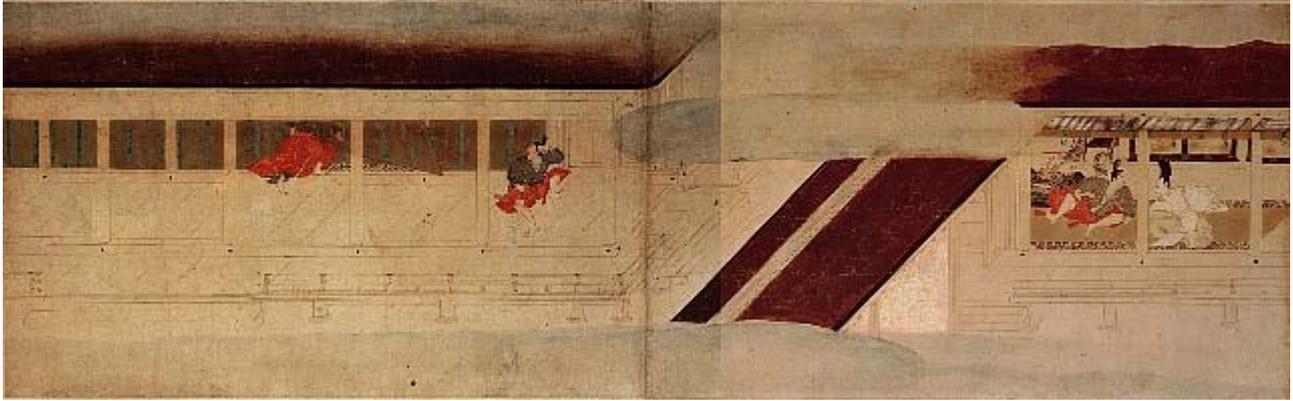
重要文化財  
婦人相學十赫・浮気の相  
喜多川歌麿筆  
江戸時代・18 世紀  
東京国立博物館蔵  
【展示期間】10月 30 日～11 月 18 日



四代目岩井半四郎の重の井  
東洲斎写楽筆  
江戸時代・寛政 6 年(1794)  
東京国立博物館蔵  
【展示期間】11 月 20 日～12 月 9 日

### 第3章 日本の時間表現

日本の絵巻物は、独自の発展をとげました。特に「異時同図(いじどうず)」という描写方法は、同じ風景や建物のなかに、同一人物が何度も登場して、時間や物語の経過をあらわします。絵巻物をひも解き、開きながら絵を鑑賞することで、絵巻を見る人は、登場人物たちが生き生きと動き出すように感じるのです。絵巻物は、まさにアニメーションの祖先ともいえるでしょう。



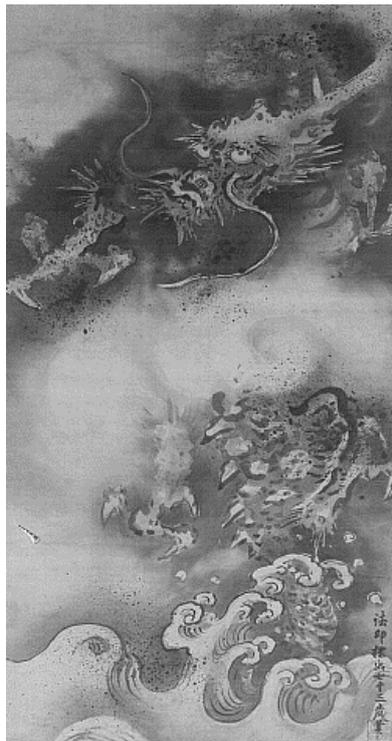
国宝 平治物語絵巻 六波羅行幸巻(部分)  
鎌倉時代・13世紀 紙本着色 東京国立博物館蔵 【展示期間:10月2日~28日】  
赤い着衣の人が何度も描かれ、時間の経過を示しています。

### 第4章 オリジナルとコピー

作者が独自に考え抜いて作り上げた、世界に唯一無二の「一点」にこそ、芸術としての価値があるものと考えられています。しかし近世以前の日本では前例に則り、まさに「模倣(コピー)」が当然のように行われていました。400年の歴史を誇り、日本の画壇に君臨した狩野(かのう)派の絵師たちは、連綿と描き続けられた手本をもとに多くの絵画を制作していたのです。



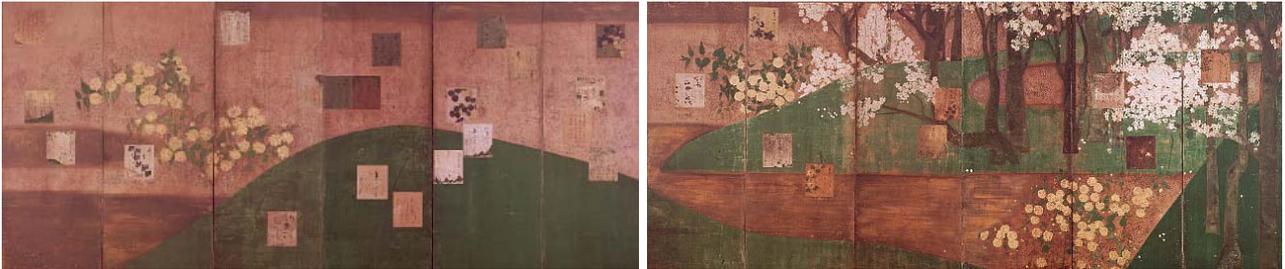
龍図  
依屋宗達筆  
江戸時代・17世紀  
紙本墨画  
東京国立博物館蔵  
【展示期間】  
10月30日~12月9日



龍図  
狩野探幽筆  
江戸時代・17世紀  
紙本墨画  
東京国立博物館蔵  
【展示期間】  
10月30日~12月9日

## 第5章 書という「芸術」

東洋において書は、造形の最上位に置かれたのですが、日本では絵画や諸工芸とも密接に関わりました。能書家の光悦(こうえつ)は、自らの書を俵屋宗達(たわらやそうたつ)など一流の絵師に下絵を描かせ、その上に文字を書きました。その文字の形は、字の示す意味だけでなく、文字そのものの形と配置が美と直結したものでした。



### 桜山吹図屏風

書: 伝本阿弥光悦筆、画: 俵屋宗達筆

江戸時代・17世紀

紙本着色 6曲1双

東京国立博物館蔵

【展示期間】10月2日～28日



### 国宝 舟橋蒔絵硯箱

本阿弥光悦作

江戸時代・17世紀

木製漆塗

東京国立博物館蔵

\* 本資料からの画像転載はできません。作品画像の掲載をご希望の方は、広報事務局までご連絡ください。